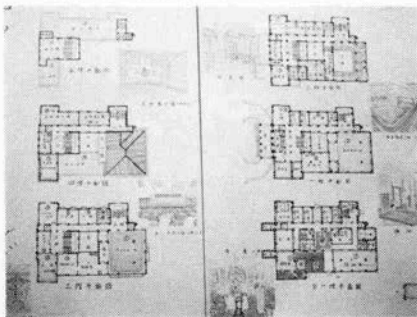


街を歩き回ることが好きなフツの女の子の私が、旧神戸商工会議所再利用企画コンペに応募して賞をいただいてしまったことは、どうやらフツではない様です。

今思うに、私は幼い頃から建築物に対する関心は強かった様です。旧居留地は、ずい分前から私の心を引きつける何かがありました。それは年

旧神戸商工会議所再利用のイメージスケッチ



でこそでき上がった姿は、現代では再現不可能なすばらしい財産と言えます。

ここ二、三年、三越や旧神戸市庁舎の取り壊しなどが重なって、私の不満は高まりました。取り壊しの情報はいつも、壊される直前にしか市民の耳に入らないし、反対を訴えても、「今さら」としか返らない。新聞で今回の保存運動

月を経た風合であり、オフィスの機能を果たしてただあたり前に存在しているビルの姿でした。そして京橋は、旧神戸ビルと港と共に、この風景となっていてます。

旧神戸ビル取り壊しの記事を見た時は、全く寂しさと怒りの気分でした。古いビルは機能的には劣るが、個性ある芸術品であり、長い年月かけ

■随想三題 24の夏の出来事

中島千尋

（薬局勤務）



の話を知った時、「事前」に言うのは今だと思いました。そしてこの運動に参加することが保存へ一歩でも近づくと考え、私にできることは参加以外にないと一大奮起することになったのです。それからというものの、真冬2月の発足会参加を始め、大雪降る中のシンポジウム、今回のコンペなど「保存をお願いする会」

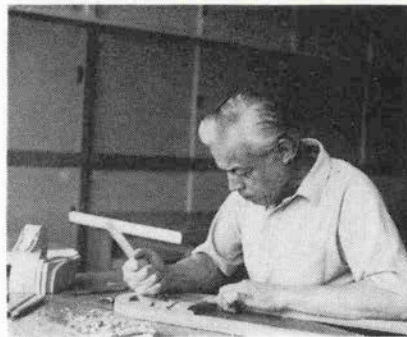
の数々の催しに足を運んだのは全て、そういった思いによるものです。

コンペはその企画を知ると同時に応募を決意しました。現地説明会で衝動的に5千円の登録料を払ったのが苦労の始まりです。募集要項は大変難しく、とてもできそうにはありませんでしたが、一市民の声を反映する唯一の手段と思いい、形だけでも何とか提出しようと腰を上げました。作品の製作は多くの友人の協力で何とか完成できました。製作中、ひたすら私の頭にあったのは、みごとに再デビューした「神戸京橋倶楽部」としてのビルの姿であり、ダンスやビリヤードに興じる神戸の紳士淑女の姿でありました。

このコンペを機会に一人でも多くの人がこの論争に関心を持ってくれたなら、それはまさに私の応募の動機です。私自身、今後の展開に関心を持っていますが、この文章を書く少し前に、ビル所有者が取り壊しの行動を始めたことを知って愕然としました。しかし、私はできる限りの努力を続けたい。保存を願う皆さん、力を合わせましょう！

ノルウエーのベルゲンの旅はN高校の英語のO先生と行動を共にした。温和で博学でまことに良い人との道連れであった。ただ、ひどいヘビースモーカで、煙草を吸わない私は少々煙に悩まされた。

ベルゲンの古風なホテルに入った時である。ロビーで少し休もうということで、深々とした革張りのソファアーに身



ははっきりと「私は喉が弱いので吸わないでほしい」と答えが返って来た。O先生は苦笑しながらしぶしぶポケットに煙草を戻した。

五分程してその夫婦は立ち上った。そしてO先生に「喫煙を我慢させてごめんなさい。私達はこれで部屋に戻りますから、どうぞお吸い下さい。ダンケー」そう言ってその処

を沈めてはっとしていると、早速隣りのO先生はポケットから煙草を取り出し始めた。

ふと前を見ると、ドイツ人風の中年の夫婦が腰を降して静かに話し合っている。私はふと気がついて「前に御婦人がいますよ」とO先生に知らせた。先生もそれと気づいて英語で「煙草を吸ってもいいでしょうか」と尋ねた。婦人

■ 随想三題

ヨーロッパのモラル

安原 進

(木彫工芸家)



を立ち去って行った。O先生の顔が急にほころんだのは言うまでもない。しかし何と後味の良いきっぱりとした言葉ではないか。「ノー」の言葉を素直に言えないのが我々日本人の癖である。

これはウィーンの本屋で家具関係の本を探していた時の事である。店内にいるそれぞれの客はまことに静かに自分

の好みの本を探し、或いはページを繰っている。

私に少し遅れて三十四、五才の女性が五才位の男の子を連れて書店の重いドアを押して入って来た。

母親は奥の方へ自分の求める本を探しに、子供は入口近くの絵本に目を輝かして一冊を取り上げパラパラとめくっていた。

外国の子供の表情と動作は日本人にとってまことにもの珍しく、可愛いこともある。つい自分の行動を忘れて其方を見入っていると、子供は強い興味の対象を絵本の中に見つけたのか、奥にいる母に向かって「ママン、一寸来て、これを見て」と言っているのか大きな声で呼びかけた。それを聞いた母親は何も言わず大急ぎで子供の傍へ歩みより、しゃがんで子供の背丈になり人さし指を自分の唇にあてて「シーツ」と言った。子供は驚いたような顔で一瞬母親の顔を見た後、自分も唇に指をあてて「シーツ」と言った。ほほえましくて涙が出そうなシーンであった。

日本の若い母親が電車の中を走り回る自分の子供に「静かにしなさい」と大声で叱っているのと何方に説得力があるだろうか。

富士正晴は大正二年徳島県に生まれた。小学校三年から神戸に住み、東須磨小学校から神戸三中（現長田高校）へ進んだ。昭和六年、第三高等学校（京都）理科に入学、一年休学し二年目に中退、三高文科に入り直したが、進学しないまま二年目に中退してしまった。一年生を四回やったわけであり、本人の言う「学



竹内勝太郎は昭和十年に黒部で谷に落ちて死んだ。富士は「三人」に師の年譜を編み、師の仕事を出版すること、自分の責任と感じた。この出版は応召をはさんで二十八年までに七冊出して一応完了した。

昭和十九年二月召集された富士正晴は中国大陸を行軍しつづけて二十一年五月に復

校を横へ出た」のである。

詩をかきはじめ、一回目の三高一年生の秋、奈良に志賀直哉を訪ねて紹介された京都の詩人・竹内勝太郎に師事。翌昭和七年、三高に入ってきた野間宏、桑原（のち竹之内）静雄と同人誌「三人」創刊。「三人」は十七年六月第二十八号を出して、戦時の同人雑誌統合に組せず廃刊した。

■随想三題

富士正晴のこと

廣重 聰

「VIKING 同人」



員。二十二年秋、井口浩（神戸三中）伊東幹治（神戸一中）、島尾敏雄ほかと「VIKING」を創刊した。「三人」「VIKING」とも十月三十日創刊であり、この月日は富士自身の誕生日に合わせた快心のたくらみであったらしい。初期のVIKINGではお互いの敬称使用はわずらわしいから同人にあだ名を

つけていた。キャプテン富士正晴はタルタラン・ド・タラスコンタンで、雑誌発行の費用を足らずとも足らずぞとの魂胆を表していた。刊行されている主なものとして、「三人」時代の鋭くしかも古典的だらかさの詩から後年の悠然たる達観の詩まで収めた泰流社「富士正晴詩集」、軍隊体験から傑作「帝国軍隊に於ける学習・序」、独特の手法による伝記「賈・久坂葉子伝」「桂春団治」「榊原紫峰」、天衣無縫の書画集「富士正晴画遊録」などがある。竹内勝太郎全集、伊東静雄詩集などの編纂もこの人ならではの仕事である。竹林の隠者とか酒仙といわれた富士正晴は世のすね者ではない。人の様々から政治まで、権威や世俗にとらわれぬ牙えた目で見すえ、噛みしだき、人間を見る達人であった。だからこそ、学者、作家、編集者など多くの人がかれとの雑談を無上の楽しみ慰め励ましとしていた。計報を聞いた司馬遼太郎の「明日から富士さんなしの日々が続くか」と思うと悲しくなります」というのに心から共感する。

写真の首からさげた名札はボール紙製、VIKING例会に必須のものであり、富士正晴の発案による。

●れんさいエッセイ●ペンのうちそと●23

雄ネコと戦争

三枝 和子（作家）え・元永定正

東京、午前三時。

例によってホロ酔い機嫌で帰宅中、ミャーツ、ミャーツ、ミャーツ、力いっぱい鳴きたてながら子ネコが道の真中へ走り出して来た。子ネコといっても、ヨチヨチ歩き（ヨチヨチ歩き）の赤ん坊ネコである。

へえ、元気だなあ、捨てネコじゃあない。

思わずかがみこんだ鼻先へ、フウーツ、と母さんネコが飛んで来た。見覚えのある白黒ブチの野良ネコだ。こないだまで大きなお腹をしていると思つたのに、いつのまに産んだの、と、こちらは親しい気持だけれど、向うはそうはいかないのだろう、目がつりあがっている。

ゴメン、ゴメン、とあやまって、酔いざましに買ったプレーンヨーグルトのふたをはずして地面におき、手近かの自動販売機でミルクを求めて来る。

行きつけの飲み屋から仕事場へ帰る真夜中（時折明け方）の道は、野良ネコの天国である。残りものにありつける食べもの屋さんが軒を並べ、ネコの喜びそうな路地が四通八達している。

私が飲みみに出かける十二時頃は人通りも多いので、ネコたちはまだ姿を現わさない。出会うのは帰りにある。反射的に数歩逃げはするけれど、こちらに敵意のないのが分るのか、すぐに振り返

り、じつと観察して来る。

コノ酔ッパライ女メ。イッタイ、何ヲシテ生キテイルノカ。

ぐらいのことは思っているのかもしれない。そこで持ち合せのあるときは、いりこやドライ・キヤッツフードをばらまいて通り過ぎる。持ち合せのないときは、あいにく、出先から回つたので今日はパスね、などと、ネコには分らない（分っているのかもしれない）言いわけをしながら通り過ぎる。それでも何だかお腹の空いていそうな様子だと、ミルクを買ってやったりする。

ミルクのにおいに警戒心をゆるめたのか、母さんネコが二、三步、歩みよったときである。どこからともなく、するすると大型の白の雄ネコが近付いて来た。首輪をはめているから野良ネコではない。

「あつ、大変……」

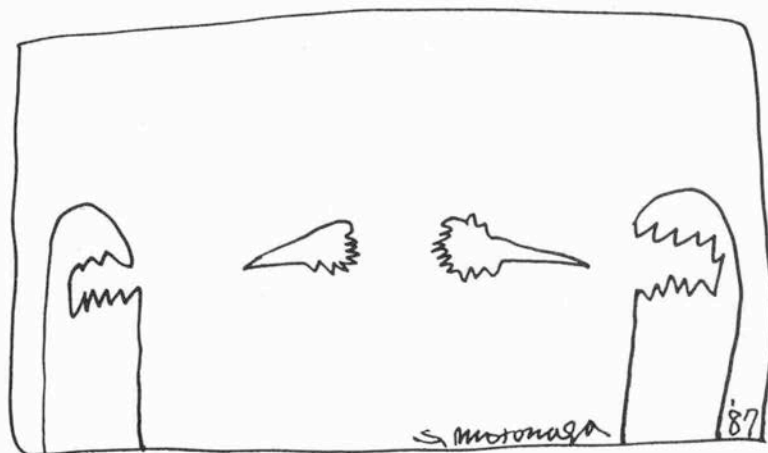
白雄ネコが走りよつたのはミルクではなく子ネコに向つてであつた。

「こらあつ」

私はハンドバッグを振り回し、母さんネコは、「フーッ」と形相すさまじく白雄ネコに迫る。しかし白雄ネコは前肢で子ネコを抱えこんで離さない。悪い予感が頭をかすめる。雄ネコは時折、発

作的に子ネコを襲って殺すことがある、と聞いていたからだ。ここは変に関わると雄ネコを刺激して逆に危いかもしれない。私は攻撃を母さんネコにまかせて、母さんネコの後から応援の形で、雄ネコをぐっと睨み据えていた。

母さんネコは果敢であった。両耳を後ろに寝かせ、低い姿勢から、自分の二倍はあろうかという大きな敵に突っかっていった。二度、三度、母さんネコのパンチを受けた雄ネコは、ひるんで子ネコを離れた。



「ギャッオ」

すかさず母さんネコは雄ネコに襲いかかりこれを追い払った。

——子ネコは無事かなあ。

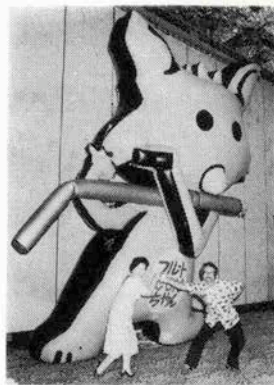
動かない。しかし死んではいけない。私は子ネコを抱きあげた。幸い、どこにも怪我はない。母さんネコがすっ飛んで帰って来た。ぐったりしていた子ネコがびくっと動いた。

「大丈夫。私は味方だよ」

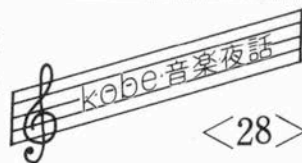
言いかけながら子ネコが最初に飛出して来た路地へ入る。路地の奥には赤いライトバンが駐車してある。はあ、ここだな。ライトバンの前に子ネコを置くと、母さんネコが側をすり抜けるようにして車の下へ走りこんだ。子ネコも、はじかれたように母さんネコのあとを追った。元氣だ。

落着いたら飲むようにと、ミルクをライトバンの前へ置いて帰ろうとしたら、奥から白とブチの二匹の子ネコがよちよち出て来てミルクを飲み始めた。襲われたネコは灰色みたいな薄黒だったから、きょうだいかもしれない。早く出て来て一緒に飲めばよいのに、地面に額をつけてのぞきこむと、薄黒クンは母さんネコを一人で占領して、真正面から武者ぶりつくみたいな恰好でオッパイを飲んでいる。やれやれ、一安心。

それにしても、先きほどの大騒ぎ、あれはいったい何だったんだろう。テリトリーを侵害されたと思ったのだろうか。条件反射みたいに子ネコを襲った雄ネコの気持が分らない。もっとも人間だって、領空侵害などと、いつ条件反射的に殺し合いを始めないとも限らないのだから、同類の殺し合い、つまり戦争というのは、生きものが避けて通れない本能なのかもしれない。



コンちゃん製作者 吉田珍郎氏（右）



フルート コン 笛吹き狐ちゃん KOBEB大集合

山腰直弘

（日本フルート協会常任理事・'87日本フルートコンベンション
企画委員長、神戸国際フルート作品作曲コンクール運営委員）

演奏はこなせない相談だから毎回開催は、とても
ムリな話。

神戸市は、ユニバーシアード開催の一昨年第一
回の国際フルートコンクールを開き、大成功を納
め、ジュネーブ国際音楽コンクール世界連盟か
ら、日本で二番目に承認された正式コンクールと
なった。

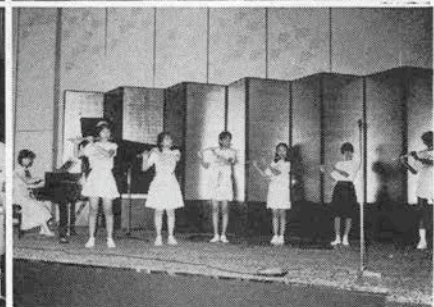
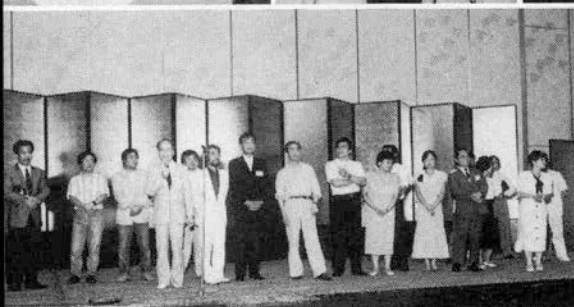
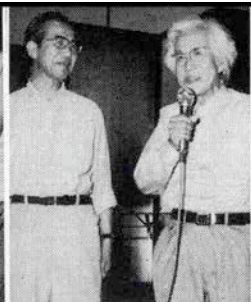
この度も、一緒にやりませんかと神戸市が「神
戸国際フルート作品作曲コンクール1987」を
プログラムに入れ、会長は宮崎市長、運営委員は
川崎優委員長、持田洋、斎藤賀雄、曾根亮一、山
腰直弘、吉田雅夫、石井博らが当り、朝比奈隆審
査委員長、広瀬量平、石井真木、川崎優、三善
晃、諸井誠、吉田雅夫諸氏が審査員で、世界から
一二一曲が集まった。

一位はフランスのヴァンサン・ボレ、二位は日
本の久留智之、三位はイタリアのジョルジョ・コ
ロンボ・タツカーニさんらが入賞したが、最終審
査の曲は、神戸出身の金昌國さんをはじめ、甲斐
道雄、宮本明恭、中川昌三、西田直孝、野口龍各
氏のトップフルーティストが演奏したことも素晴
しく、入賞作品が、世界の笛吹きたちに愛好され
ることだろう。

フルートの街KOBEBに、この夏「笛吹き狐ち
ゃん」が約三千人近く大集合した。この催しは「フ
ル・コン」こと「第3回日本フルート・コンベン
ション」（実行委員長 曾根亮一、企画委員長 山腰直弘、事務局長
持田洋）で、二年に一度開かれるが、今回は7月31
日と8月2日ポートアイランドの神戸国際会議場
で、日本フルート協会（会長 吉田雅夫）と神戸市の共
催で開かれ、毎日一三〇〇人が三日間、延べ人員
四千人、約八割が、プロとアマのフルーティスト
たちだ。

第一回は静岡のつま恋、第二回は名古屋の芸術
創造センター。今回の評判はすこぶる良くて、コ
ンベンション会場としてのロケーションも最高。
こんなに評判がいいと次回は困るといわれ、もう
一度KOBEBで、それでは主催者のわれわれが疲
労困憊することになる。

何しろ協会の出演者は全員ノーギャラ。三日
間の参加費一万円を払ってプロ・アマの差なく手
弁当で、いわゆるアゴアシ（旅費旅館代）も自前。
たとえ世界の涯からでもだから。フルート吹き
が、笛以外の実務・肉体労働の凄腕を発揮して、
純度の高い魔術不思議なパワーで協力し合う。プ
ロがたとえ出演料十万円を頂いてもこの雑務と



左上/後夜祭でかみ開き。左・曾根亮一、中・赤坂神戸市助役、右・W. ベネット氏 左上中/右・日本フルート協会会長吉田雅夫、左・高橋成典の各氏 右上中/関西地区音大生によるアンサンブル、指揮持田洋氏 右上/W. ベネット氏と関西の若手によるアンサンブル、指揮朝比奈千足氏 左下/コンペションを成功させた実行委員達 下中/左よりセツ矢、甲斐、石井、眞木、金、山腰、曾根各氏 右下/神戸ジュニアフルートアンサンブル

第3回フル・コンは、神戸のアーチスト吉田稔郎さんが、コンちゃんのスカイ・アートを創って下さりシンボリックに楽しめたし、オーブニングには藤倉推峰氏と天領太鼓、イギリスのウイリアム・ベネットの演奏。二日目は酒井秀明、工藤重典各氏のコンサートなどトップの演奏や、各地から来たフルートアンサンブル、学生のアンサンブル、講演、クリニック、作曲家たちとのディスカッション、ソロ(二七名応募、一位京都の富田治彦さん・アンサンブル(各地より三五組出場)のコンクール、フルートメーカーのブース、売店、パーティ、また協賛による金沢徹氏の墨画の個展など三日間は、フルート愛好家とフルーティストと学生たちで、文句なしの「フルートの街KOBÉ」であった。いずれにしても現代は「狐」の時代でなく、つまり一匹狼じゃダメ。皆が手をとりあって、演奏家、作曲家、批評家、ファン、業者、技術者などが自由に出会って話し合い、創り、奏であうという研鑽と学習と、親睦の催しを開く「コンベンションの時代」なのだ。

これは、アートの限らず、学者も経済人もすべてにいたるのではなからうか。芦屋がハープの街をめざし、国際ハープコンクールを開くそうだ。これは、いいイメージの街づくりでもあるのだ。

神戸での「フル・コン」を終えて、神戸の皆さん御協力ありがとう。次は国際フルートコンクールでお逢いしましょう。



インタビュ

●珈琲飲みながら……

アマチュア放送局から 始まった神戸時代

森本 毅郎 さん

《ニュース・キャスター》

ソフトな語り口が巾広い層に人気の森本毅郎さん。エッセイストとしても数多くの著者があり、喋る、書く、両分野で活躍されている。今回神戸ポートピアホテルでの公開講座で来神中のところをインタビュした。

——NHK時代には神戸にも勤務されたことがあるそうですが。

昭和45年から二年半の間でした。当時は国際会館に間借りしていた時代で、初代のアナウンサーとして第一声を僕が発したんです。放送局といってもアナウンサーはたったの二人だけ、スタジオは国際会館の倉庫のような一室。機材も全て大阪からの借りもので、まるでアマチュア放送局のようでした。なにしろ放送を出したことのないスタッフだけでやっていたんですからね。「今日から神戸放送局を開局します。」という音声が出たとたんにスタジオの外で拍手が起った程ですから。その後、現在の場所、トアロードの角に移ることになり、皆で引越し作業をしましたよ。いすやテーブルなどを運んでね。その頃からFMに加えてUHF局も流すようになり、NHKとしての体裁も整ってきた。だから二年半の神戸勤務で創設期の放送局を経験させてもらったわけです。僕自身、こういった手づくりの放送に携わって充実した時代でした。特に「神戸」という街は変化に富んでいるから取材の対象としては格好の場所でした。特に取材記者として経験を積むには。だから僕みたいに、もともとア

ナウンサーをやりたいなかった人間は、どんどん記者クラブにも出かけて行ったりしましたよ。それまで入局以来、岡山、佐世保と転動してきて「どうせ俺なんか」とふてくされて斜を向いていたのが、神戸局でいろいろ経験し、無から創り出すおもしろさがわかってきた。何となくここ（神戸）でなら一生いてもいいかな、とまで思い始めて。だから二年半後に東京勤務と言われても割とクールに受けとめていました。

——なぜアナウンサーという職業を選ばれたのですか。

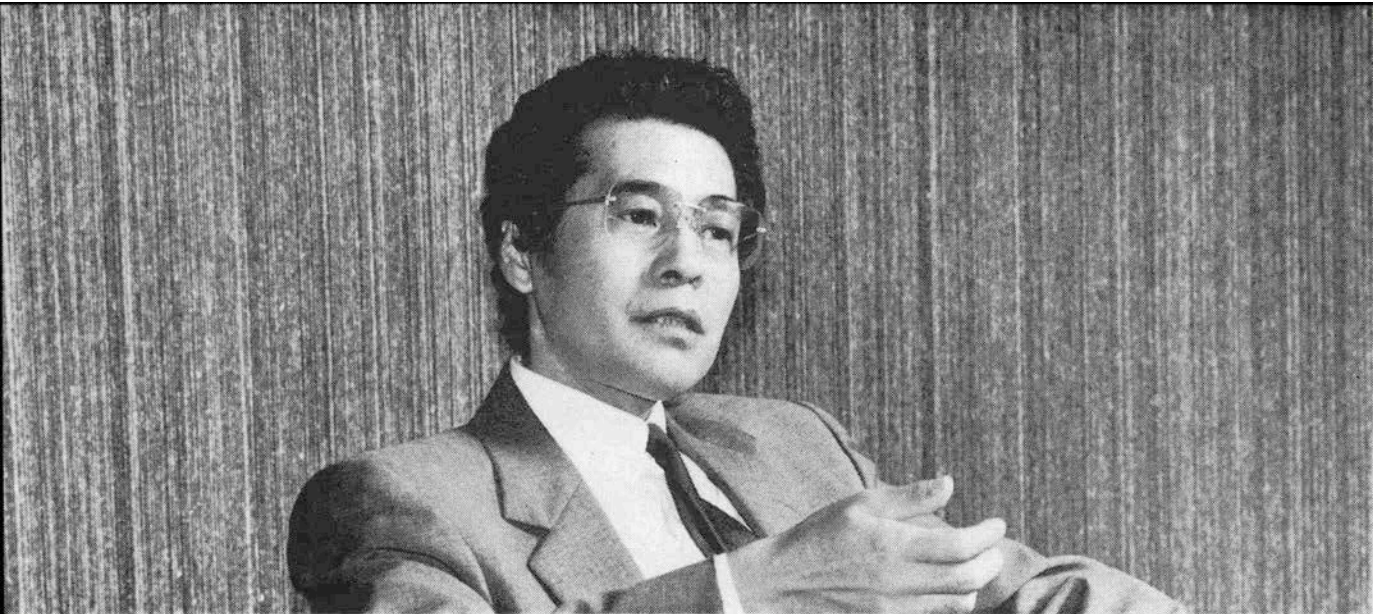
アナウンサー以外にはなれなかったんです（笑）。

入社の際にディレクター、記者は学校での成績順に取っていく、と言われましてね、もともとジャーナリズム指望だったものだから、アナウンサーで受けて、中に入ってから部署代えをしてもらおうと甘い考えで入った訳なんです。ところが20年間一度も部署がえという声はなかった。放送の世界と新聞の世界でなら仕事の差はあると思いますが放送という同じメディアの中でなら記者とアナウンサーの違いはないはずですよ。最近ではキャスター時代で、記者とアナウンサーが重なった部分で仕事をし、両者の間にはほとんど境のない時代になってきていますね。僕も今の時代に放送界に入っていたら随分違っていただろうなあと思いますよ。

——モノを書き始めた動機は？

書くことは好きだったから新聞記者にもなりたかつ

昭和14年東京生まれ。慶応大学文学部卒業後、NHKに入局。昭和55年4月から「ニュースワイド」でキャスターを務める。昭和59年NHK退職、フリーに。現在TBS「森本ワイド モーニング・アイ」のメインキャスター。「母のオルガン」他著書多数。



「よいアイデアがあれば採用させて頂きたいですね」と語る森本さん

た。ところが僕は兄（森本哲郎氏）が新聞記者でペンの世界で生きている。まともにもいっても15歳の年齢差がある訳ですから活字の世界では常にセカンドしかあり得ない。それが嫌だったんです。放送界に入ったのも次善の策という訳です。書き始めたのは聞き直ることができたからです。40歳過ぎて書き始める自分に、それだけの才能がある訳でもなし、遊びでいいじゃないか、と。いつまでもこだわっていてもしょうがない。兄貴は兄貴で認めて、自分は自分で書き始めた。

——NHKから移籍された理由は？

NHKの組織自身の問題ではなく、僕自身にとつてのNHKがもう限界に達していたんだと思う。だからその組織から抜け出た訳です。要するに、訳がわからんっていうのでもいいかな、と思い始めたんですよ。というのはサラリーマンをしていると先が見えてしまう。10年後の席、停年の時の居場所、そして停年後の自分が。しかも思うようにならない自分の姿が。それならいっそ一人でやるのがベストだと思い、全くのフリーで組織相手に働き始めた。自分を必要とされている時は使ってもらえるが、価値がなくなれば捨てられる。非常にシビアだけれどハッキリしている。先の見通しは全くわからないが、それもいいかな、と思いましてね。

——今後はどのような方向に…。

僕の場合、知らない間にたまっていたものが、突然はじけるといふパターンですから。それに僕自身の中では硬派も軟派も融合して生きていて、これから先、どんな方向に進むかはわからないですね。キャスターに凝り固まるのは嫌だし。だから自分の肩書きも最近「五目家（こめくか）」なんてのをつけようかって思っているんですよ。五目―何でもやる、ごちゃまぜ、という意味を含めてね。でも、もう一つ評判がよくないので、よいアイデアがあれば採用させて頂きたいですね（笑）。

パリのグラン・ルーブル 計画展を見て思う

嶋田 勝次△神戸大学建築学科教授▽

五月の連休の一日、新築成った京都国立近代美術館を訪ねた。

建築の設計は東大の横文彦教授の手による明るい現代的なスマートさにあふれたものであり、平安神宮の大鳥居のすぐ横の地で、周辺の風致文化の環境に見合った姿が調和している。

ここではこの新建築を解説するつもりではなく、二週間程この美術館の中で行なわれた「大改造すむルーブル美術館——宮殿からピラミッドへ」展を紹介したかったのである。

これまで長くルーブル美術館の主出入口は、南翼北側の中庭に面したところからであった。ルーブル宮殿の北翼部分を占めていた大蔵省が移転するのを機会に、この宮殿全体を美術館に大改造する計画が定着して、その工事が進んで来ていた。

一昨年渡欧時に立ち寄った時には、南翼と北翼の建物の中庭は、落書きっぱいの塀ですっぽりおおわれ、どの程度どんな工事が進捗しているのか全く分らなかったが、京都でのこの展覧会を見て全体像を知ることが出来、想像以上のビッグプロジェクトに理解することが出来、一層の関心が深まると共に、完成への期待が更にふくらんで来た。

ルーブル美術館の現在の展示面積三・六万平方米から七万平方米に倍増し、収蔵庫などは二万平方米から八万平方米に拡充しようとしているが、このルーブル宮殿の中庭の真中に巨大なピラミッド形の大空間の出入口アトリウムを設け、この地階でいろんな方向の人の動線を集約整備しようとしている。

この計画は、ルーブル美術館の大拡充を通じてパリ中心部の都市

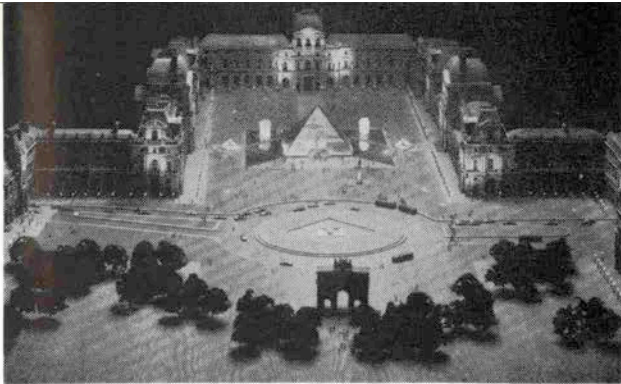
空間の大編成への大変なきつかけになるものと思われる。

この計画を担当したのは、中国系のアメリカ人建築家 I. M. Pei (ペイ) 氏である。六四年のフィラデルフィアのソサイエティ・ヒルの三棟の高層住宅と周辺環境の計画づくりのたくみさに注目して以来、次々と実現される建築の健康な美しさには感心していた。

七三年からのボストンのクリスチャン・サイエンス・センター、七六年のワシントンのナショナル・ギャラリー東館、八〇年のボストン美術館西館など、いずれも奇をてらったり、人をおどろかすようなものはないが、明快な構成とコントラストのある表現は、みごとにガラスとコンクリートの素材のよさを抽出することにもつながると共に、古いものと新しいものを拮抗させて緊張感を生み出して来ている。

このルーブル大改造のプロジェクトで、まわりの伝統的な建築群のデザインに対して、対象的な巨大なガラスのピラミッドを導入された意味は大きい。このことは都市デザインのうえからも賛否両論がある。これまでのペイの建築デザインのセンスがパリの都心にはつきりと持ち込まれたといえる。

この計画の担当にペイを指名したのは、その作風を容認するフランス政府の意識も読みとれるのだが、この現在の最先端の計画は歴史の蓄積と対応し合うものと思ひ、大胆な進展が楽しみである。



グラン・ルーブルプロジェクト模型写真

△その96▽

三菱銀行神戸支店のビルを通して

「企業が地域に対して持つ責任」

を考える

武田 則明△建築家▽

三菱銀行ビルがトリアロードの大丸前の良く目立つ場所に竣工した。そして旧居留地のビルのオーナーや多くの市民から「あのビルは何ですか」と問われる。あのどっしりと落ちついた石づくりの古典的なアッティカ式柱基、コリント式柱頭、きちっとしたエンタブレチニアー、特にアーキトレイブ

の三角屋根を持ったブロンズの扉がすばらしく、気品と安定感そして安心感を知らず知らずのうちに市民に与えていた。仮設の覆いが取りはらわれ、新しいだけで何の魅力もない建物が出現すると、あきれて物も云えないショックを受ける。デザインも最も進んだと云われるハイテックでもポストモダ

(上) 再建前の三菱銀行神戸支店ビル
(下) 新しくなった同ビル



ンでもなく、むしろ10年も古い何処にでもある特長のない安いだけで面白味も欠ける建物が都市景観上最も目立つ場所に出現したからだろう。このビルの貸事務所はまだ空室があると聞く。現代旧居留地では空室と空地が大きな問題となっている。テナントを他のビルから奪って自分のビルだけ満たすことは銀行の様な半公的企業が行うべきではない。むしろ地域の活性化を援助するのが銀行の役割だろう。それではテナントを増やす為にどうすれば良いか。それは仕事があり働く人が増えなければならぬ。それなのに設計を東京へ発注して何が地域の活性化と云えるだろうか。この仕事だけでも立派なテナントが一つや二つ増えると考えられないか。次に神戸のまちづくりを考えた場合、東京や大阪のまねをやっていたのでは駄目である。神戸は神戸らしいまちづくりを進めなければならない。そのために旧居留地を中心に未だ残っている近代洋風建築と落ちついて風格のある街並を大切にしなければならぬ。神戸の大切な資源を壊して自分だけうまい汁を吸うなんて一流企業の行うことではない。利潤追求は企業の使命だろう。しかしその利益をいかに地域社会に還元するかが問われている。

神戸を舞台とした 文化装置の創出を

■座談会出席者（敬称略）

吉田 光邦〈京都市立大学名誉教授〉

安水 稔和〈詩人〉

森本 泰好〈神戸地下街（株）・専務取締役〉

末廣 光夫〈音楽プロデューサー〉

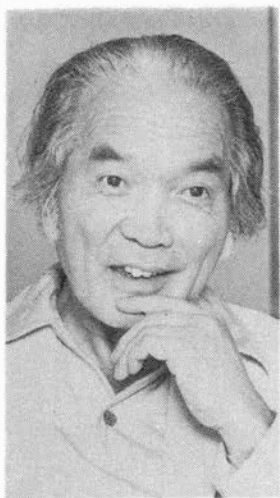
伊藤 誠〈姫路市立美術館・副館長〉

村上 和子〈サンテレビ・ディレクター〉

神戸市は、ファッション都市・コンベンション都市・国際スポーツ都市づくりを核としたインターナショナル・シティをめざし、行政・財界・文化界・市民が一体となって様々なプログラムが進行している。

六甲アイランド建設、西神エリアの開発、ポートアイランド拡張、神戸ハーバーランド構想などビッグプロジェクトが目白押しである。

本キャンベーンは、21世紀を目前にして神戸はどうあるべきかについて各論の問題提起と分析を行い、国際文化都市への実践的な指針を展開するものである。



吉田 光邦 さん

——芸術の分野だけに限らず、最近は街づくりや企業の経営に至るまでいろんな分野で「文化性」がクローズアップされています。今回は幅広く神戸の文化を分析し、さらに文化づくりを進めていくためにはどうすればよいかを、さまざまな角度から論じていただきたいと思います。まず最初に、神戸の文化の特色についてそれぞれの立場からおうかがいしたいのですが。森本さんからいかがでしょうか。

森本 いつも思うことは、油絵にしても版画にしても、神戸の作家というのは一般の人々にもすごく人気があるんですね。それに神戸には趣味でやってる素人の人でもプロ顔負けの才能を持っている人が多い。やはり一般の市民の中に文化が定着してるんですね。

伊藤 姫路から神戸を見ると、神戸についてはわからない面がよく見える。神戸は異質な文化が出会う港町であるせいか、新しいものでもどんどん吸収してしまう。



村上 和子 さん



末廣 光夫 さん



安水 裕和 さん



伊藤 誠 さん



森本 泰好 さん

みんな構えてないんですね。どんなものにもでもスツと入っていただけるんです。

安水 大阪や京都に比べると、神戸は歴史的な伝統は伺もないんですよ。また、何もなかったと思った方がいい。何もなかったところでそこに住んでいる人たちがいろんなものを創っていったわけです。最近では「神戸はじめ物語」的に、何でもかんでも神戸が発祥の地だって言われるわけですが、実際はそうじゃないものも多いですよ。

吉田 京都は神様や仏様でがんじがらめでしょう。大阪にも天神さんぐらいいはいるわけですが、神戸には中心になるような神仏がない。だから自由奔放にいろんなお祭りができたりするんですね。

安水 いつでもパツと何でも作っちゃうんだけど、捨てる時もパツと捨てる。実に身軽ですね。

森本 「神戸はじめ物語」などを見ると、歴史のない町が必死で歴史をつくろうとしている感じがありますね。

私は、文化というのも経済力がなければ発展しないと思う。資本の蓄積があって初めて文化が花咲くんです。

その意味でも、今低迷している重厚長大産業に、第3次産業までは無理でもせめて第2次産業ぐらいまではいい欲しい。有能な人材がたくさんいるわけですからもったいないですよ。今はショッピングセンター一つつくるのにも文化的な視点がないとできないんですからね。是非重厚長大に再登場願いたいですね。

吉田 大阪の阪急三番街ができた当時はすごいと思いましたが。あれで人の流れが変わりましたからね。でも店が並んでいるだけで人の集まれる場所がないでしょう。

だから文化が育たないんです。産業としてだけやってもだめですね、文化と結びつかないと。

森本 その通りですね。その意味でも文化を生む舞台をつくりたい。ヨーロッパの街並みを見るとよくわかるんですが、人間の感性を育てる街にはいたるところにカーブやスロープがある。フラットで直線的な街には文化は育たないですね。私は以前から、六甲山を神戸のセン

トラルパークにしてはどうかと思ってるんです。感性を育てるソフトな街づくりを、六甲山も取り込んで進めていきたいんです。

末廣 文化の舞台づくりというのは大事なことです。

出演者は他府県から招いてもいいから、とにかく神戸にその舞台をつくらうということで企画したのが、実は「神戸ジャズストリート」なんです。神戸をミュージシャンたちの舞台であると同時に楽屋にもしてもらって、相互のコミュニケーションをはかってもらおうというわけです。「とにかく神戸に来て下さい。素晴らしい舞台がありますよ」という呼びかけですね。

村上 文化っていつも「舞台」とかモノで表現されるわけですが、その土地の空気みたいなものもあると思う。

私は今、高砂市でブライダル都市づくりに取り組んでいるんです。京都もそうですが、高砂も歴史を守ろうとしてがんばらめですよ。その点神戸は何をやっても赦してもらえろという意味での「いい加減さ」というか、京都とはまた違った伝統がありますね。最近寿命も延びて昔からの神戸を知っている人も多いわけですから、若い人たちにそういう伝統を伝えて欲しい。

森本 若者と言えば、神戸は日本の7大都市の中でも非常に若者の人口が少い。原因は在神企業の新規採用が少いのと、大学の数は多いが大きな大学が少ないからなんです。これは文化の問題だけにとどまらない大問題ですよ。

安水 その現象がずっと続いて行くようなら「過疎の町」になりますね、神戸も。大きな会社の支店が神戸から引き上げるとかいった経済的な問題ならともかく、学生が東京、大阪へ出て行ってしまうといった様なことにもなったら大変です。どういう理由があるのか調べてみる必要がありますね。

伊藤 でも姫路なんかはもっと学生数が少ないんです。若者にとって魅力ある街にしようとして、目標にしてるのが神戸なんです。神戸には頑張ってもらわないと。

森本 ついでに言いますとね、60才以上だったか、老人の比率の高さでは全国2位なんです。だから年寄りが多くて若者の少ない町だと。単純に言ってしまうね。

“ここにしかないもの”があれば人は神戸に来る

村上 人口の少ない若い世代の人達、特にできる人であれば、東京へ出なさい、大阪へ行きなさい、神戸は住むところではあっても仕事をする街ではないとなる。昨今はダンナ衆がスポンサーになって、芸術家が好きな時間に好きに活動ができる時代じゃないから、生活のための工夫もしなきゃならない。30代の人なんか、まだ認められてなければ職を求めてどうしても東京へ行かなければならないという問題がありますね。

森本 これからという世代の層が少ない。

村上 斬新なことをやりたいと思っても、ジャンルによっては組織がしっかりあって、締めつけが厳しいということもあります。

末廣 神戸は娯楽性に乏しいということ、感じませんか。早い話、映画でも、いい作品なのに神戸では公開されてないのが多いですよ。コンサートでもそうですけどね。文化ホールや国際会館より、フェスティバルホールへ行かなくちゃいけない。これも若者が寄りつかない一因だと思う。

伊藤 神戸は積極的にいろんな施設をつくる町ですが、政令都市で、市立美術館のないのは神戸と、あとはあまりないんです。県立美術館があるじゃないかと言われるかもしれませんが、そういう意味では若者の、ここで活躍する場所がない。県立美術館が出来たあと、第二県立美術館を作ってくれという動きがあったんですが、神戸市には要求しないんです。神戸市はそんなのには関心がなさそうだというわけですよ（笑）。作家連中が言うんですから寂しいですよ。

吉田 ガイドブックなんか見てもギャラリーの数が少ない。これだけの人口の町でこんなものかなあと思って見

たんですが。その時考えたんですが、何故美術館がこんなに少ないのか。

伊藤 一つはマスコミ。地元での活動が仲々取り上げてもらえない。

村上 同感ですよ。中にいながらね、感じますね。

伊藤 姫路でいくらやっても、サンテレビさんはあまり関心を示してくれない(笑)。むしろ、大阪、京都に眼が向いている。ラジオ関西さんもその傾向がありますね。あんまり言うて怒られますけど(笑)。西の人間が寂しいのは兵庫県のマスコミが神戸以西を全然ふりむいてくれないことです。

村上 地元だからこそ、表現されたものをただ視聴者に伝えるだけじゃなくて、これはという人材を育てていく位の気風というか、それが欲しいと思うんですよ。ジャーナリストの務めだと思うんですが、なかなかフォローできないというもどかしさがあります。報道するだけでなくつくり出す仕掛け人である必要が絶対あると思う。

吉田 例えば横浜なんですが、どうしても神戸と対比してしまうんですね。横浜の施設なんかはかなり充実して来てるんですよ。とくに開港資料館は全国的にも知られていて京都の研究者がわざわざ行くような状況なんです。

神戸にはそういう布石が乏しいような気がするんですね。人形博物館もあるし、昔からあったシルク博物館もまた改装するんですよ。そういうやり方が神戸にも欲しいですね。シルク博物館は日本の展示が主なんです。私は世界のものをやれと言ってるんです。シルクロードにひっかけてイタリーからフランスから世界のシルクを全部集めたミュージアムを展開した方がいいと言ってるんですが、そうすると全改装になる。そういうのが神戸にも出て来ていいんじゃないだろうか。文化的な魅力で人が神戸にやってくる。神戸に行かないと見られないとなるときとそうなる。横浜の資料館がそうなってるんですよ。その分野の研究者なら横浜へ行くという空気ができるわけですよ。神戸はそのあたりをもっと考えるべきで

すね。そうすれば日本中の目が神戸に向きますよ。

安水 2、3年前なんですが、文学館というか兵庫の文学の資料館をつくらうという話があったんですが、文書館という名前がいま進められてるそうなんです。美術とは違って文学となると、必要性をなかなか理解してもらえない。ただ最近各地で文学的資料をまとめたといった動きがありますし、現に東北にも資料館が出来てます。

資料館は大変地味かもしれないけれど、あそこに行けばというものがいくつも出来ることによって人が集まるんです。海洋博物館なんかも結局そうだと思います。

吉田 学問的なことを言いますと、神戸は開港資料館とか、アジア貿易の資料館を考えてもいい。これは神戸大学がある程度は資料を持ってるんですが、充分じゃない。学問的には神戸の名物になり得ます。いろんな形で全国的に神戸に目を向けさせる仕掛けが要りますね。

「一産業ミュージアム」が鉄則

伊藤 最近では須磨の水族園、あれも一つの成果ではないかと思えます。同じ水族館でも、ちよっとアイディアを変えることによって、これまでとはずいぶん違った魅力が出て来ます。

村上 ただ水族園の場合、駐車場の配慮は全くせずに設計してる。近所の人は大迷惑。水族園自体はなるほど素晴らしいけれど、周辺への配慮も欲しかったですね。

吉田 神戸はファッション都市だといいますが、ファッションミュージアムがないですね。横浜のシルクもファッションミュージアムに切り変えようという提案をしてるんですよ。たとえば、東京で催したモリ・ハナエのコレクションを、一カ月展示しておくとか。話題呼びますね。たとえば玉三郎の衣装とか、ヤマトタケルの衣装なんてのも面白いんじゃないかと思えますが。

森本 神戸は学校にしても芸術系のものはないですよ。非常に実利的なんです。

吉田 一つの産業は一つのミュージアムを持つ、これが

これからの鉄則だと思うんです。そうすると産業自体のアイデンティティも明確になるだろうし、市民の話題にもなるだろう。神戸がファッションミュージアムをつくるのは今が一番いいチャンスだと思うんですが。

末廣 ミュージアムと言うと私の一番大きな夢は、神戸ジャズ博物館をつくることですね。

吉田 どこかのビルのテナントからでも始められるといひですね。

末廣 しかしちゃんなのはやりたくないし(笑)。夢を語ってる方がやはり楽しい(笑)。

安水 まあ、夢とおっしゃらずに(一同笑)。

森本 神戸の基幹産業であった神戸製鋼にしても川崎製鉄にしてもあれだけの人材がある所なんだから、あの財産を今風な方向へ仕向けてもらって、もう一度神戸に再投資してもらいたい。それともう一つには、神戸は少し綺麗事を言いすぎに思うんです。文化というものはもっとドロドロしたものであって、無色透明ではよくない。「これは神戸に似つかわしくないんじゃないか」と、排他的にならずに、異質なものをどんどん取り入れていかないとけない。もともと神戸は他所者のつくった町。伝統文化らしきものはなかったんだから、神戸が妙に伝統を持つとかえって具合悪いんじゃないですか。

末廣 私も神戸で一番必要なのは、新しい血だと思う。村上 他所から見るとその町が客観的によく見えますね。だから私が神戸っ子にもかかわらず、『プライダル都市高砂』を提唱して、市長以上に一生懸命やれるのも、高砂の人間じゃない他所者だから。横から「これ

が足りないんじゃないか」とびしびし言ってくれる人を受け入れ、「それじゃあいつちようやってみましょうか」という、ジョイント姿勢の文化を展開することが大切だ

と思うんです。

末廣 昔の話になりますが、15年ぐらい前の神戸まつりの終了後、サンTVが企画して、外部から黒田征太郎とか永六輔とかをゲストに呼んで座談会をしたでしょう。

その時あまりに好き放題言われたというので、吊し上げを喰った。せっかくいい企画をたてて外の意見を取り入れようとしても、内部で握り潰してしまうのでは意味がない。これでは発展性がないですね。

村上 「誉めてくれなきゃ、その人嫌い」という気質がありますからね。それは反省すべき点です。

伊藤 美術に関してよく言われるのですが、京都は伝統があり、その反発から新しいものが出てくる。神戸もまた、全く違う理由だけど新しいものが出易い所なんです。しかし、その根をおろさせるものが、神戸には少ないですね。神戸には可能性はものすごくあるんだから、雰囲気だけではなく、それを生かせる施設その他の器を作っていかねければいけないと思う。

安水 言葉に携わる人間というのは、どうしても「それなりにやっていけばいいやんか」というざぼらな精神になつてしまいがち(笑)。結局私としては、何もしない立場にたちたい。例えばですが「鉄道が敷かれるという時に町なかに敷かれたら困るからと川向うに敷かせた。それが50年後にはいかに先見の明がなかったかと子供や孫に怒られる。ところがもう100年たったら川向うに敷いたことがいかによかったかということになる」そういう風に考えると、私としては「足を引く張る側」にまわりたい。そういう人間と、何かアイデアを出して積極的にやる人間とがいて、それで町はうまくいくのではないですか。町づくりということに関しては、50年なり100年なりのスパンで考えた方がいいと思います。

吉田 これから神戸は、現代の人の記憶に残るような、イメージを持った町にしていかなければならない。昔は東西の二大貿易港の一つとして教科書に載っていたけど、もっと現実を見据えて取り組んでいかないと……。

「神戸とは何ぞや」という価値観の問題からスタートして、そしてその価値観を否定するなり、また増幅するなりして、そこから取り組むことが大切ですよ。

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区港島中町 6-3-2
TEL (078) 302-3321

オールスタイル総本社

取締役社長 川上 勉
神戸市中央区港島中町 6丁目 5-1
TEL (078) 302-3311

